

キリスト教学校であり続けること



金城学院大学
宗教主事
吉松 純

金城学院大学とえば「キリスト教学校」「お嬢様学校」「名門女子大」というイメージが東海地区では今も根強く残っています。その一方、近年の少子化で受験生人口が減少の一途をたどる中、本学も他大学同様に入学者確保に知恵を絞り尽力しています。より魅力ある大学になるべく本学は2026年度に文学部・総合歴史学科や経営学部・経営学科、デザイン工学部・建築デザイン学科、情報デザイン学科など新しい学部学科を創設し、7学部12学科の新体制に舵（かじ）を切ります。

以下、本学がキリスト教学校としてどのような取り組みをしているかをご紹介したいと思います。まずお伝えしたいことは、多様性が尊ばれ強調される社会にあって、キリスト教学校であることや、女子大であることのみを取り上げて、その是非を議論しないことです。「宗教を前面に出すと入学者数に影響する」とか「女子大は先が見えないから共学にすべき」などと近視眼的に議論するのではなく、社会全体から大局的に俯瞰（ふかん）して多様性の中で一つの在り方としてキリスト教学校であることや女子大であることを議論すべきではないかということなのです。キリスト教大学はプロテスタント校、カトリック校を合わせると、統計データによって若干の違いはあるものの日本の大学全体の1割になります。つまり10校に1校がキリスト教学校であり、その使命はとも大きいと言えます。

では、本学はどのような取り組みをしているのでしょうか。それは「三本の柱」に表されています。内訳は①礼拝、②キリスト教学（1・2）の履修、③キリスト教の時間、です。「礼拝」は月々金ほ

毎朝、木曜日は昼礼拝もあり、草創期の宣教師たちの思いを知ってもらい、福音を宣べ伝えるという願いを込めて、授業の一環として出席を促しています。1年生には前期、後期10回ずつをノルマに課していますが、中には70回、80回と礼拝に出席する学生もいます。そのような学生に出会うことは、この上もない喜びです。「キリスト教学」は大学に来て初めて聖書を手にする学生が多いという事実を踏まえて、聖書やキリスト教の教理、歴史を現代社会の問題などと絡めて教授するものです。本学の建学の精神である「福音主義キリスト教に基づく、女性への全人教育」を学問的に実践する場です。「キリスト教の時間」は、社会で活躍しているキリスト者をお招きして講演を聴いたり、キリスト教関連の音楽会を開いたりキリスト教文化の普及に努めています。他にもキリスト教に関連した講座やプログラムが選択授業にあります。また、建学の精神を深く理解した教員たちがゼミや講座で個々に学生の指導に取り組んでいます。

この8月に名古屋の某テレビ局で「戦後80年と平和」を考える番組を連日放映していました。その一つに「名古屋大空襲体験者のお話を聴いて、それを記録し語り伝えていく」という取り組みを紹介するものがありました。金城高校卒業生で、今は施設に入居している92歳のご婦人を本学の現役の学生数人が訪問してお話を伺ったのですが、ご婦人が「学徒動員によ

り工場で働いていた多くの同級生を空襲で亡くし、つらく悲しかった」と語り、学生たちが真剣に聞き、対話する姿が映し出されていました。学生たちの学部・学科までは紹介されませんでした。が、平和や社会正義について熱心に指導している教員や、そのような講座を受講し学んでいる学生は少なくありません。

クラブ・部活などでも社会奉仕をしています。ハープ・アンサンブル部やクワイアはロシアのウクライナ侵攻が始まった2022年から毎年、教会で支援コンサートを開き募金を募ったり、他大学と共同で支援プログラムを企画、実施しています。23年、学内のキリスト教センターと国際交流支援センターの共催で大学クリスマス礼拝に、日本ウクライナ文化協会理事と、戦火を逃れ日本で暮らしているウクライナの方々をお招きして、共に礼拝を守り、ウクライナ語の賛美を学ぶなど貴重なひと時を持ちました。年末には幼中高大が協力して特別献金を募

り、災害被災者の方々と障害者支援を行っているキリスト教団体などに送付しています。言うまでもなく、これらは「神を愛し」「隣人を愛す」キリストの教えに基づいています。

本学の目指す教育とは何か、どのような学生を世に送り出したいか。それを端的に言い表しているのが「強く、優しく」という教育スローガンです。日本のジェンダーギャップ指数は世界148か国中118位と、今もって不平等が改善されていません。そのような中において女性が活躍するには、芯（心、信）が強くなければなりません。性差別や困難に負けない女性、そして隣人を愛することができる女性、そのような人間を育成するにはキリスト教の教えこそが最適であると信じてやみません。他者を思いやることのできる心、キリストの愛《無私の愛》を持つた人間を世に送り出すことこそ、本学の使命であり、ひいては全キリスト教学校の使命ではないでしょうか。

1889年にアメリカの南長老教会（現、米国長老教会）の宣教師アー・ランドルフによって前身の女学専門冀望館（きぼうかん）が創立されました。日本の女性教育がまだ軽んじられていた時代のことです。翌90年に私立金城女学校に改名され、その後、専門学校、中学校・高等学校と発展し、1949年に大学が創立されました。現在は小学校を除き、幼稚園から大学院まである、東海地方で最も古く伝統あるキリスト教主義の総合教育機関となりました。

時代の変遷や、学生と社会のニーズの変化と共に大学の在り方も変わってきました。昨今では女子大の必要性、存続も議論されています。しかし、どんなに時代が変わり、大学生気質が変わっても変わらないものがあります。それは金城学院の礎であるキリスト教です。

以下、本学がキリスト教学校としてどのような取り組みをしているかをご紹介したいと思います。まずお伝えしたいことは、多様性が尊ばれ強調される社会にあって、キリスト教学校であることや、女子大であることのみを取り上げて、その是非を議論しないことです。「宗教を前面に出すと入学者数に影響する」とか「女子大は先が見えないから共学にすべき」などと近視眼的に議論するのではなく、社会全体から大局的に俯瞰（ふかん）して多様性の中で一つの在り方としてキリスト教学校であることや女子大であることを議論すべきではないかということなのです。キリスト教大学はプロテスタント校、カトリック校を合わせると、統計データによって若干の違いはあるものの日本の大学全体の1割になります。つまり10校に1校がキリスト教学校であり、その使命はとも大きいと言えます。

では、本学はどのような取り組みをしているのでしょうか。それは「三本の柱」に表されています。内訳は①礼拝、②キリスト教学（1・2）の履修、③キリスト教の時間、です。「礼拝」は月々金ほ



ハープ・アンサンブル部が大学の近隣の高齢者ケア・センターを訪問



大学祭「金城祭」で、チャペルでのクワイアの賛美



クリスマスコンサートでのハンドベル部の演奏